
天使と過ごした30日

藤宮 瑞樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使と過ごした30日

【Nコード】

N7195Y

【作者名】

藤宮 瑞樹

【あらすじ】

学校の課題で提出した作品 リメイク予定

プロローグ

私が住んでいる星はかつて「地球」と呼ばれていたらしい。「らしい」というのは、今はその名前ではないからである。今のこの星の名前は「フイーニクス」、古い言葉なのだそうだが、この言葉の意味を知っている人は少なくとも私の周りにはいない。

誰も知る人がいないほど古い時代の話。この星に元々住んでいた人間は、はるか昔に大きな戦争のせいでほとんどいなくなったり、遠く離れた他の星へと旅立ってしまった。ぼろぼろになった地球に残された人々は、地面の下にもぐってひっそりと住んでいた。ただ、どある時はるか遠くの星から、この星の人間とは全く違う「人間」がやってきて、この星の環境を短い期間で人間が住めるぐらいに戻してしまったそうだ。人間たちは、「彼ら」を「天使」と呼び、彼らがこの星を去った後、彼らが生まれ変わらせたこの星を「フイーニクス」と呼ぶようになったらしい。

さらにこの話には続きがあつて、それは「天使」の外見的特徴についてのことだった。「天使」は私たちと同じような姿をしているんだけど性別がなくて、体や目、髪の毛までもが金で出来ているかのように美しく輝いていたらしい。

無論、私たちからすればそんなのは神話でしかなく、到底信じられないものだ。他の星から性別がない人間がやってきてこの星を再生させただなんて、あまりにも非現実的すぎる。

私もあの時までそう思っていた、目の前に体中が金色に輝いている人間が現れて「地球はここですか？」と聞かれる時まででは。

1 日目

そのときの私の驚きぶりは、並大抵のものじゃなかっただろう。何しろ旅の途中に泊まった宿屋の一室で、本を読んでいるときにいきなり現れたのだから。私は驚きすぎて、読んでた本をその人に向かって全力で放り投げてしまった。

その人は間一髪で飛んできた本を避けたが、「ご、ごめんなさいっ！ 敵意はないんです！」と言いなから私に謝って来た。

しばらくして私の思考は動き出し、「どうやって入って来たの？」と突然の侵入者に問いかけた。その人は「地球に降りるために広い場所を探してワープしてきたんだけど、まさか人がいるとは思わなくって」

ごく普通とは言い難い返答に私は少し面喰らってしまい、「地球に降りるためって……、まさかあなたは他の星から来たの？」っていう答えの分かりきった質問を投げかけてしまった。彼は「ずっと昔に私たちの祖先がここにやってきてこの星を再生させたという情報を掴んで、それを頼りにきたんだけど……」と少し落ち着かない様子で答えた。

そこまで聞いて、私の中で一つの記憶が蘇ってきた。彼の話は、小さいときに私が聞いた『天使』の話とぴったり一致するのだ。それに、その話が本当だという疑いようなない証拠がそこにはあった。彼は、体も、髪の毛も、瞳までもが美しい金色に輝いていたのだから。

5 日目

彼の名前はルシアンというらしい。神話のとおり、本当に性別がないらしいけど、私は一応『彼』と呼ぶことにした。私が宿屋で旅立つ準備をしている時に「君の旅に同行させてほしい」と言われ、私は付いてくる人を拒むようなことはしないため、彼も旅に同行させることにした。しかしさすがに金色の肌は目立つので、全身をびっちょりした服や手袋でおおい、頭にはフードをかぶせて目立たないようにした。あまり街のほうへ行くことはないのでこれぐらいで問題はないだろう。

話を聞いてみると、彼らは地球人の血を引いた人種らしく、昨日話していたとおり、自分たちの祖先が住んでいた地球の存在に興味があつてわざわざやってきたそうだ。この星は今、彼らの祖先の行いを称えて、「フイーニクス」という名前になっているという、彼は「そうかそうか」と少し満足げに頷いた。彼にはこの言葉の意味が分かるのかと思ったが、どうも先祖の功績のほうに気に入っているようだ。

彼らは生殖能力がなく、星のあちこちに生えている『生命の樹』という特別な植物から生まれるらしい。「私の星には『生命の樹』と呼ばれるいくつかの大きな木があつて、それにくつついてる実の中から生まれるんだ。『生命の樹』は私たちが生き抜くために必要な情報がたくさん教えてくれる。だから、私たちは『樹』の存在なしには生まれることはできない」とルシアンは私に語っていた。聞くだけだと、生まれるときはさぞかし神秘的な光景なのだろうと思える。それに大量の情報まで入っていると考えると、彼らにとってはまさに母親のような樹なのだろう。

私たちは男と女の存在がいないと生まれることは難しい。しかし、ソレイルの人々も『生命の樹』がなければ生まれることはまずできない。

『生命の樹』がなくなったらどうするのだと私はルシアンに聞いた。彼は驚いたような顔をして考え込み「……私たちには生殖能力がないから、まずみんななくなっちゃうだろうね」と寂しそうな顔で笑った。

10 目

ソレイルの人には生殖能力がないため、『恋愛』というものをしたことがないということを、私は今日学んでしまった。

「ルシアンは、『恋愛』ってしたことある？」って聞くと、「『恋愛』……？ 『恋愛』ってどんな感情なの？」といったってまじめな表情で返してきた。

私は言葉に詰まった。『恋愛とは何か』なんて考えたこともなかった。というより恋愛っていうのは人間の本質に基づくものだと思うっていたから、改めて考える必要もなかったのだ。

「男と女がお互いのことを思い合って、ずっと一緒にいたいって気持ちが生まれること……かな？」

私が一生懸命自分の知恵を絞りだしながら喋ると、ルシアンは納得した様子で「なるほど、そんな感情が『恋愛』なのか。私のところだと性別がないから、そういう概念がないんだ」と返した。

「そっか……」私はそれだけしか言えなかった。それと同時に『恋愛』の概念がない彼をすこし寂しく思った。私は一人でずっと旅をしてきたからあんまり言えることでもないけど、生殖の必要性がないと恋愛もしないのだろうか？

15 日目

優しい男の人は今までに何人も見てきたが、彼ほど私の思い描くような恋人に近い存在もないだろう。本当は男でも女でもないはずなのに、不思議と私の気持ち惹きつける魅力があった。彼曰く、ソレイルの人々は基本的に温厚で賢く、知恵があることがその人の何よりもの宝物になるらしい。その言葉通り、彼はとても優しく、頼りになった。

彼は私が知らないことを多く知っていたのだ。それを教えてもらうかわりに、私も彼にこの旅で身に付けた様々な知識を彼に教えた。

彼は吸収が早く、私ですら覚えるのに時間のかかった技術をあっという間に習得してしまう。優しいだけではなく、しっかり自分の意見も言ってくれるため、これからどういう進路をとって旅をするかという相談もできた。

そして、私が無謀なことをしようとするときちんと止めて叱ってくれる。そんな彼を見て、私はこのまま彼とずっと旅ができたらいいなと思った。

ここまで書いて私は気が付いてしまった。ひよつとしたら、私は彼に恋をしてしまっているのかも知れない。でも彼には『恋愛』の知識はあっても、感情は存在しない。

つまり、彼が私のものになることは絶対がない。

なんて、残酷なことなんだろう。

25日目

久々の日記である。いつもなら4、5日ごとにつけているこの日記がつけられなかったのは、私の怪我が原因である。次の目的地へ行く途中に大きな狼に襲われて、背中に大きな傷を負ったのだ。いつもなら獣にであつたら、真つ先に逃げるか隠れるかするのだけど、今回は回避ができなかったと。

狼は私だけではなくルシアンまで狙つてきたのだ。狼が彼に飛びかかってきた時、私は無意識に彼をかばっていた。背中に走った焼けつくような痛みと、彼が私の名前を呼びながら自分の方に抱き寄せる感触を感じた瞬間、私の意識は途切れた。

次に目が覚めたのは、どこかの村の民家にあるベッドの上だった。ルシアンが心配そうに私の顔を覗いていたのが見えた。

彼の話によると私の予想以上に傷は深かったらしく、急いで手当をした後、近くの村にいる医者の方へ連れて行ったそうだった。私は3日ほど意識がもどらず、目覚めるまで彼はずっと私のそばに付いていたらしい。そして彼は開口一番、私「目が覚めて本当によかったよ、私のせいでこんなことになって……、本当にごめん」と私に謝ってきた。謝らなきゃいけないのは、彼に心配をかけた私のほうなのに、そう思うと、私は涙が溢れてきた。

彼は黙って、「心配をかけてごめん」と言いながら泣きじゃくる私の頭を撫でてくれた。

30日目

別れの日は思ったよりもずっと早くやって来た。彼は元々1月の間だけここにいるつもりだったらしく、研究の期間が終わったら帰らなければいけなかったらしい。私がそれを聞いたのは2日ほど前である。

何故それを教えてくれなかったのかと彼に問い詰めたら、「ごめん、私と一緒に旅をしているときの君の顔があまりにも楽しそうだったから、言いづらかったんだ」彼は残念そうにに笑いながら、私の目を見つめた。

迎えの船が来た時、私はとうとう彼に気持ちを打ち明けてしまった。

彼は少し困っていたようだが「絶対に、またこの星に来るよ。その時はまた会おう」とだけ言い残して、大きな船に乗ってあつという間に空の彼方へ消えてしまった。

彼には私の気持ちは分からなかったと思うが、私は言ったことは後悔していない。分かってもらえなくてもいいから、「好きだった」ということを伝えたくてしようがなかったのだ。

今になって振り返ると、彼との日々は私にとって何よりも宝物であり、大事な記憶だ。出会いは本当に突然だったのに、いつの間にか打ち解けて、親しくなっていた。

一緒にいたのはとても短い期間なのに、彼の笑った顔や、怒ったときの顔、私の顔を覗き込んでいた時の心配そうな顔 どれも忘れられないものになっていた。

やっぱり私は、天使のような貴方のことを好きになっていたよう

だ。

エピソード

研究は思ったよりも順調にいった、何よりも彼女の協力があつたからだろう。彼女の存在がなければ地球の研究は途中で行き詰っていたかもしれない。

彼女は私たちの知識と引き換えに、私が知らないことを色々と教えてくれた。彼女と二人、旅ばかりの30日間もトラブルは多かったが、なかなか楽しいものだった。

あれからずいぶん経ったが、今でも彼女のことを思うと、少し寂しくなってしまう。彼女がああ30日間にとった様々な表情や、行動が今でも思い出せるのだ。そして、思い出すと少し胸が苦しくなる。

以前に彼女が話していた『恋愛』の感情というのはこういうものなんだろうか？ 今の自分では到底分かりそうもないが、私はいつか彼女の元へ戻りたいと思。

この気持ちの答えを見つけ出すためにも。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7195y/>

天使と過ごした30日

2011年11月21日16時19分発行